



Fig. 3 Number and date of beetles (*monochamus alternatus*) emerged from bait logs.

87. まつくいむしの産卵対象木

林業試験場九州支場 ○岩 崎 厚
森 本 桂

いわゆるまつくいむしのうち、マツノマダラカミキリの産卵対象木については、林学会九州支部講演集第24号に報告したが、今回はその他の穿孔虫も含めて、調査した結果を報告する。

1. 調査方法

1970年4月から10月まで毎月1回、下記の3試験地で樹脂量調査を行ない、樹脂量の各段階のマツを数本ずつ伐倒して袋に入れて網室に保存し、羽化する虫を調べた。

試験地

植木試験地：熊本県植木町，熊本営林署打越国有林52林班り小班，アカマツ微害林

大矢野試験地：熊本県大矢野町，熊本営林署飛岳国有林120林班り小班，クロマツ激害木。

松生試験地：熊本県芦北町松生（町有林）アカマツとクロマツ中害林。

健全木に穿孔虫類が産卵するように、植木試験地のマツに餌木をまきつけて、産卵された卵が発育するかどうかを調べた。

2. 結果と考察

樹脂量と加害虫の関係は、表1の通りである。健全木に餌木を巻きつけて産卵させた結果は表2に示した。

1970年3～6月の健全木から、シラホシゾウ類が羽化した。網室内で袋の上から産卵した形跡があるのでこの期間のデータは除いた。7月以降のものは厳重に調査木を包んで袋に入れた。また1971年5～6月に、大矢野と植木で3本の健全木を伐倒して同様に保管したが、シラホシゾウ類は羽化しなかった。

この調査で明らかになったことはつぎの通りである。

健全～異常木から羽化する穿孔虫の種類は、表のように極めて単純であり、枯死木から羽化させると種類は多くなる。

シラホシゾウ属3種と、マツノマダラカミキリは、土から産卵し、稀に+から産卵する。表2に示したように、餌木を巻きつけて健全木に産卵させても、幼虫は発育していない。

表1 樹脂量段階と加害虫の関係

樹脂量	卅	卅	+	±	-	枯
調査本数	31	6	23	27	24	9
ニセマツノシラホシゾウ			?	●	●	●
マツノシラホシゾウ			○	●	●	●
コマツノシラホシゾウ				●	●	●
クロキボシゾウ	○	?	●	●	●	●
マツノマダラカミキリ			○	●	●	●
キイロコキクイ				●	●	●
その他					ツノキクイ	ニトベキバチ

○ 1例のみ ● 多数例 ? 産卵可能性大

表2 餌木巻きつけて健全木へ産卵した卵の発育 シラホシゾウ類は長さ30cm調査

試験木 No	丸太大きさ		マツノマダラカミキリ					シラホシゾウ類	
	中周	中央長さ	産卵孔	卵なし	卵死	幼虫死	幼虫生	幼虫穿入死	幼虫生
231	29.5	100	26	15	11	0	0	24	0
236	31.0	100	32	26	1	5	0	40	0
429	31.0	100	8	1	4	3	0	30	0
438	31.5	100	78	55	23	0	0	16	0

キイロコキクイは、土から穿入する。
 クロキボシゾウは産卵範囲が広く、稀であるが土にも行なう。
 調査した120木のうち、古い食痕はクロキボシゾウによるものが4本のマツについて発見されたが、いずれも若い幼虫の間に死んでいた。他の種のはなかった。このことは、クロキボシゾウが産卵したマツの一部は枯れずに回復することがあるが、他の穿孔虫が産卵するようになったマツは、殆んど枯れてしまった

ことを意味する。

3. 要 約

まつくいむしと呼ばれるマツ類穿孔虫は、異常になつたマツに産卵を行なう。人為的に健全木に産卵させても、ふ化直後の若い幼虫で死んでしまつて発育できない。

樹皮下を食害するという加害方式では、これら穿孔虫は二次害虫である。

88. シラホシゾウ類の行動におよぼす気象の影響

林業試験場九州支場 ○岩崎 厚
 森 本 桂

シラホシゾウ属3種の餌木に誘致される数は、5月から7月初めにかけて2ないし3のピークがあるといわれていた。被害マツ内で越冬した幼虫は、6月下旬

から羽化脱出するものが多いことから、5~7月に餌木へ集まるものは殆んど成虫越冬をした個体と考えられる。誘致数が変動する原因について、気象の関係を